名古屋
石田学園報
第9号　平成9(1997).10.23

名古屋明徳短期大学
星城高等学校
星城中学校
星の城幼稚園
名英予備校
名英図書出版協会

＝今こそ伝統文化の継承を＝

理事長・学園長　石　田　正　城

学園創立者石田鍐徳先生は50年前の名古屋英学塾 創設時に『英語研究の目的』と題して次の文を残されている(祈明日143ページ)。

『ここに吾人が英語を学ぶのは、言葉そのものを知るのが最後の目的ではなく、これによって英米先進国の道徳、科学、その他あらゆる泰西文化の内容を理解しこれを摂取して、一はわが人格修養の資料となし、一は以て文化国家延いては世界国家建設という人類最終の理想実現に寄与するためであります。－中略－　さて、英語研究はかくのごとく情勢によって勃興してきたのでありますが、ここに吾人の最も注意すべきは、われわれは東洋人であり、東洋には固有の立派な文化が存在することであります。この東洋特有の美点長所を失わないで、これを裨益し、より完成せんがために泰西文化を学ぶということを、夢寐にも忘れてはならないのであります。－中略－

自己を没却して他に心酔するということは、識者の与せざるところであります。吾人はよく物の本末を考え、事の軽重をはかり、東洋文化と泰西文化の調和によって、理想的な世界文化国家建設につくさねばならぬと思うのであります。そしてその第一歩は、世界語である英語を学ぶにあると思うのであります。－後略－』

この創立者の意志を継いで「生徒に世界的な視野を与えたい」と昭和51年、星城高等学校長に就任してすぐに、世界のリーダー国であるアメリカに渡った。たどたどしい会話で姉妹校を求めてから20年、現在では、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、韓国に10校の姉妹校を持ち、交換留学・短期留学・訪問交歓会と積極的な充実した交流が続いている。

“百聞は一見に如かず。百見は一体験に如かず”と異文化に触れ、同世代の外国人と英会話で交流する体験を一部の限られた者だけでなく、星城高等学校全生徒に海外研修体験を踏ませたく、昭和61年より大韓民国への修学旅行を実施している。

1300年前、日本は百済の都“扶余”から多大な文化を学んだ。その旧跡、現在の群山市に姉妹校「東山学園」を求めた。事前視察の時はソウルオリンピックの2年前で、情熱的な国民性の韓国人が一層燃えたっていた頃であった。訪問した学校はいずれも活気に溢れ、驚くばかりの学習意欲、スポーツ練習、そして愛国心、軍事教練からくるキビキビした態度等々、礼節第一精神がみなぎっていた。

この地を修学旅行先に踏み切ったのも、韓国の高校生と友好関係を持つことによって、日本人が失った精神を取り戻すことができると思ったからである。

また東山学園の理事長、校長先生を初め市民の方々から、過去の問題に拘らず儒教精神に裏打ちされた寛大で友好心に溢れた歓迎を受け、韓国人の気持ちを理解できたからである。

日本国内での修学旅行も大変であるが、毎年800～900人の“民族大移動”である。その成果は多大なものがあり、旅行作文を読むと99%の生徒が素晴らしい訪問であったと評価している。10年を経過してやっと定着してきたが、この間約8,500人の生徒が人格の向上に糧を得た体験をして帰国したことは、建学の精神の具現化・高揚の一助になったと喜んでいる。

しかし、十年一昔というが、韓国の社会環境、教育環境も大きく変化している。残念なことに日本の悪い面ばかりをまねて、韓国本来の文化が年々廃れていくように感じている。日本人も韓国人も、もっと自国の伝統文化をしっかり継承していくことが、真の国際交流ひいては創設者の言う平和文化国家建設につながるのである。その担い手である青少年を指導し育成する我々の責任は重い。

中学創立5周年 高校創立35周年を記念して

校長　石　田　正　城

星城中・高等学校は創立以来、高校では35周年、中学校では５周年とそれぞれ語呂の良い年を迎えました。創立記念日には実のある行事をと、生徒には感動を与え、来賓、教職員にはレベルの高い内容の講演会を企画しました。21世紀を目前に過去の教育について反省し、形式より内容の充実を重視した教育をしていくことが肝要であると思います。

世間では公立の中高一貫教育制度等、教育改革について、いろいろ議論されていますが、何よりも基礎、基本をしっかり指導していくことが教育の原点であります。明治時代はものめずらしさに西欧思想を、第二次世界大戦後はアメリカ思想を盲目的に取り入れ、日本の先祖が営々と築いてきた東洋思想、日本独自の教育精神が時として軽視され、個人主義、利己主義が過度に横行しているのが現状であります。

この点を反省しながら、本校では家族、親子関係をもっとも大切な基礎とするために一層力点をおいた教育をするように努力を傾注していく覚悟です。

〔星城中学校〕

名古屋石田学園創立50周年を機に、学園のさらなる発展、拡充のための将来構想の中で、星城中学校開設準備委員会を発足させました。建学の精神に基づいた新しい中・高６カ年一貫教育の実施を目指し、平成５年１回生43名を迎え、無事開校することができました。

少子化の時代を迎え、これからは一層教育の真価が問われる時期です。５周年を機にさらに積極的に教育内容の充実を図り、発展の契機にしたいと考えております。教職員一同全力で取り組んでまいりますので今後とも一層のご支援をお願いいたします。

記念式典　　９月21日(日)

記念講演会　おじんの創作童話会（鬼頭　隆　氏）
①桜の下で、月の下で　②すてきな人
素晴らしい詩の朗読で、生徒、保護者も感激をしていました。

記念碑　　「仰星」と彫られた石碑。後援会のご支援を受け正門前に設置しました。

〔星城高等学校〕

創立者石田鐘徳先生と今後の展望

総務部　柴　田　　清

35年前の豊明のこの地は家はなく道もなくちょっとした丘陵地でありました。創立者石田鐘徳先生は、青少年の教育に情熱的な思いを寄せられ、高等学校の設立を願って良い場所を探しておられました。中学校時代の同級生で親交の深かった、当時の豊明町長古橋三男氏に相談されました。彼はまた地元の漢学者として教育に関心の深い方で、創立者の思いに賛同され、この豊明の地に是非とのことで協力をされました。さらに、古橋氏の教え子である地元の有力者の浜島鎮正氏によってこの土地を確保され、設立の運びとなり、昭和38年４月校舎が完工すると同時に第１回生254名が入学しました。創立者はこの学校を「星城高等学校」と命名され、愛知の名門校に育て上げる理想と希望に燃え、営々と努力されました。しかし、おりしも中学生人口の減少期(第１次急減期)に出合い、理想とする生徒が集まらず、大変悩んでおられました。さらに学内の組織も十分とはいえず既存の学校に追付くには容易なことではありませんでした。しかし、創立者石田鐘徳先生はこの石田学園をさらに大きくしようと、幼稚園を設置されその名を「星の城幼稚園」と命名されました。先生はことあるごとに、空の星と相談され思いを語られていたことと思います。将来は短大、大学へとの構想もお持ちのようでしたが、思い半ばにして動脈瘤により、急逝され、さぞかし無念であられたことと思います。幸いなことに長男の石田正城先生は創立者の遺志を十分に受け継がれ、現在に至っています。我が星城高等学校は「建学の精神」のもと、進学の実績の向上・スポーツの振興・国際交流の活性化・基本的な礼儀作法の徹底を四本の柱とし、職員一丸となって努力し、今日の星城高等学校を育て上げ、今では、６部門をもつ一大石田学園となりました。星城高等学校の発展を、ある中学校の先生はこう話されました。『私は星城高等学校を愛しています。私は星城高等学校を卒業し、愛知教育大学に入り、卒業後中学校教師となりました。私は母校星城高等学校に一人でも多くの生徒を送っ

てあげたいと思っていました。就任当初、私が生徒に星城高等学校を受験するように進めたら、気の進まない生徒が多かったが、その後何年かたって再び同じ指導をしたら、前向きで真剣に考える生徒が多くなり、そして現在では生徒のほうから星城を希望し相談にやってくるようになりました。私はこの星城の発展の素晴らしさに喜びと安堵の思いです。』

今後は再び急減期がやってきます(シュミレーションによると20年間位続く予定)。この危機を見事乗切ることが、星城高等学校のさらなる発展の基礎ではないかと思います。星城と共に、名古屋石田学園の大きく飛翔するのを楽しみにしたいと思います。

＝教学運営会議中間報告＝

「自己点検・自己評価に基づいた教学面の充実策」をテーマに掲げた平成９年度名古屋石田学園教学運営会議の第１回会議が５月29日に、第２回会議が９月17日に開催された。年間４回の会議の中間報告を以下に要約する。

第１回会議の冒頭で石田学園長は、厳しい環境の中で学園の維持発展を支えるのは教学の充実であることを強調、織田副学園長の就任を紹介し、具体的な取組みに生かせる有意義な討議を期待すると挨拶。続いて副学園長の司会で議題 (1)各部門の課題と充実策－具体的達成目標と達成への取組－を柱に６部門が提出資料を説明した後、討議に入った。

短大は半期制と新カリキュラムの発足に合わせ、学生アンケートを緊張感溢れる授業の実現に生かしたいとし、学長メッセージを発信して全学的一体感を高める構想を報告した。高校は教科指導の改善に役立つ自己点検・評価に向けて全教員の意志疎通に取り組みたいと述べ、アンケートに対する短大教員の反応を尋ねた。短大ではアンケートに対する危惧・逡巡・批判を超えた実践が不可避な事態への認識が浸透しつつあると述べた。中学からは仰星コースとの校舎の一体化も実現して、６年間で育てる一貫教育の意識が根付いてきた一面、日常的な課題克服に直面しているとの報告があった。少人数で纏まりが良い幼稚園では園内研修が定着しつつあり、全体のレベルも向上して保育の質の充実が保護者の信頼を高め、園児募集にも成果が見られるようになったと報告され、その実践が高い評価を得た。

生徒数が年々漸減している予備校は苦境の中で改善に手を尽くしており、個別指導等では成果を収めているが、情報収集・提供では立ち遅れが否めず、抜本的な生徒確保対策を模索していると報告。

事業部は売上拡大・経費節減による収益増大へテーマを置き換え、販売店の見直し・新教材の開発・事務管理の合理化等に努め、職員の個性・能力を業務に反映させる観点で自己点検を生かしていると報告し、“生きがい、やりがいのある職場づくり”の確立が大切であると述べた。

各部門の報告への質疑応答を通じて部門の抱える課題について理解を深め、互いに協力していくことの大切さを確認した。最後に副学園長が報告したことを会議の流れに沿って実行し、各部門それぞれが魅力ある学校・部門となるよう共通の目標を持つことが肝要であると総括した。学園長も言葉だけで終わらせることなくぜひ実行して欲しいと結んだ。

第２回会議の挨拶で学園長は、学園の生き残りには教育内容の充実しかなく、これは生徒学生の意欲と教員側の教育力が相伴って成し得ると述べ、前回以降の各部門の取組みを評価し、継続実行を促した。

「教学の充実に向けて－目標の達成を阻害する困難な状況をどのように克服しているか－」を議題に実践報告を行った。半期制で学生にゆとりが出来た短大では、アドバイザー制で教員と学生の対話を豊にし、怠学～退学を抑止したいと報告。高校・中学は夏休み中の教員研修で自己点検・自己評価を教師一人一人の教育力を高めるものと位置付け、本校教育への期待に応える必要最小限の仕事として取り組む雰囲気が高まってきたと報告した。園児の生活を丸ごと抱えている幼稚園教育では、教師の人格の全てが子供の前にさらけ出されるので、自ら進んで研修に取り組むことが教師の必須条件であるとし、この４年間毎月第４土曜日に続けてきた全教員参加の園内研修について報告がなされた。課題山積の予備校からは指導方法・設置コースの再検討に着手したとの報告があり、メインとしては年中無休体制・土日曜フル授業で現役生講座の充実を図る方向であると述べた。事業部は短大ホームページ開設を歓迎、拡販ＰＲに積極的に利用したいと述べ、今年度の個人テーマの実践にかかる７月の中間報告会では各自が成就感を持ったようだと報告した。続いて高校の共学体制について生徒減少の中で興味・関心や適性、進路に対応する学級編制が説明され、また、短大のアドバイザー制についての具体的な内容と実践の成果や授業方法の充実にかかる教員間の討議、サークル活動の支援などについて活発な質疑応答があった。

最後に副学園長が仕組みや体制が趣旨通り機能しているかチェックすることが改善にとって大切であると纏め、学園長が各部門はこの会議で検討したことを生かして成果を挙げて欲しいと期待を述べた。

＜名古屋明徳短期大学＞

◎『卒業式・入学式』

※卒業式…“主婦が答辞”

3月19日の卒業式で、英語科に社会人入学した主婦三戸礼子さん（39歳）が、卒業生の代表として答辞を述べた。三戸さんは首席で卒業、在学中には英検準一級も取得した。４月からは３倍の競争率をくぐって南山大学外国学部に編入し、さらに勉強を続け通訳になる夢を追い続けるとのことです。

※入学式…“台湾の学生が新入生代表の抱負”

4月 3日の入学式で、昨年度に続いて外国人留学生の鄭雅慧（チェン・ヤフイ）さん＝台湾出身＝（国際文化科）が新入生代表で抱負を述べた。鄭さんは、自国で日本語を１年間学んだ後、昨年４月に来日。東京の日本語学校で、勉強して日本語１級と堪能になった。

短大では日本文化コースを専攻する。鄭さんは「たくさんのお友達をつくり、日本の歴史や習慣を勉強したい。帰国したら日本語の教師になります。」と話した。

◎マルティメディア教室の充実

＝インターネットホームページも開設＝

本年４月より LINK (Language & Information Center リンク）と名づけられた新しい多目的情報処理教室がオープンしました。

急速な進歩をとげる情報化社会に対応すべき教育や有機的な語学教育を行うためのものでありますが、同時に名古屋石田学園の全ての部門の情報を発信する基地でもあります。

５月末より名古屋大学及び学術情報センターを経由したインターネット接続が実現され、７月には電子メール専用のサーバーも立ち上がり、他方石田学園のホームページの作成も急ピッチで進んでおります。秋には最新の情報を満載したホームページが完成する筈です。各部門の募集活動のお役にも立てることと思っています。

セメスター制への移行、カリキュラムの改革と時期を一にし、通常の情報処理教育も従来に比べ大幅な内容変更を行い、多様な授業を展開しております。

機能を活用しマルティメディア装置を授業に使う教員もあります。空いている時には学生達も自由に使っており、ある意味では教員より積極的に取組みはじめた学生が増えて来ました。電子メールを使って海外の若者との交流も始まりました。

本学でのオープンカレッジのパソコン講座も大変な人気であり地域密着化にも大変役立っています。

なお、ホームページのアドレスは

http://www.n-ishida. ac.jpとする。

◎専攻科卒業生で学士誕生

「学士の学位を取得する」ことは、専攻科を設置し学位授与機構の認定を受けた当初からの目標でした。しかし学士の学位授与の要件は専攻科の修了に加えて、大学で16単位以上の単位取得と学習成果（レポート）・試験の審査に合格することとされており時間的にも容易なことではないと予想されました。

そこで他の大学へ出向いて聴講するよりも、放送大学の科目履修生として、自由な時間に学習することによって、要件を満たす単位を取得することができるのは好都合であるとして、専ら放送大学によることとしました。学生諸君にとってはそれでも多忙な学修生活があったと思われますが、２名の学生がすべての審査に合格し、この３月に学士の［学位記］が授与されました。

このことは学位取得を実現した本人はもとより本学としても極めて喜ばしいことであると同時に、後に続く者に明るい展望を与えてくれました。

＜星城高等学校＞

＝平成９年度インターハイで星城高校勢が熱闘＝

８月１日から京都府で開催された全国高校総体にレスリング・柔道・剣道(男女)・バスケットボール女子・水泳男子の６種目に星城高校の精鋭44名が出場した。7月11日の愛知県選手団結団式では剣道部の斉藤智幸君と岩瀬洋子さんが選手宣誓を行った。

県大会からの健闘を紹介すると、レスリング・グレコローマンでは46kg級石田、50kg級神谷、54kg級上假屋、58kg級川村、63kg級近藤(善)、68kg級小島、74kg級近藤(雄)、115kg級加藤の諸君が各級を制覇し圧倒的な強さを発揮した。柔道では71kg級松原、86kg級鶴田、95kg超級沢田の３選手が優勝、４階級で３位入賞を果たして団体優勝をかちとり、この勢いを駆って東海高校総体も団体優勝。86kg級で鶴田竜也君が個人１位に輝いた。同大会ではレスリング・グレコローマン115kg級の加藤賢三君も個人優勝を果たした。水泳では、県大会100m平泳、200m平泳の両種目を大会新記録で制した栗本直博君に全国制覇の期待が寄せられた。男子メドレーリレーで星城高チームは３位に入り、400m個人メドレーでは岡部選手が３位入賞と健闘した。

炎暑の下、展開された全国大会では、県大会団体アベック優勝の剣道は、女子個人戦の江口選手とも予選リーグで、東海大会準優勝の女子バスケットも１回戦で惜敗。レスリングは団体ベスト16、個人では54kg級上假屋選手がベスト 8、神谷、川村、加藤選手が各級のベスト16に入った。柔道団体は予選リーグで敗れたが、個

人戦で松原、鶴田両選手がベスト16に入り優秀選手表彰を受けた。水泳期待の栗本選手は100m平泳４位、200m平泳３位の大健闘で全国の注目を集めた。一方、全国高校銃剣道大会で星城高校が団体３位入賞して伝統校の面目を発揮した。熱い闘いに全力を尽くした選手諸君と指導に当たられた先生方へ敬意の拍手を贈りたい。

◎高校野球県予選で惜しくもベスト８ならず!!

第79回全国高校野球選手権大会愛知県予選において、星城高校は昨年ベスト８になり今年は大いに期待された。順調に１～２回戦を勝ち抜き、３回戦では強豪亨栄高校を３－２で下し、４回戦も勝ち、ベスト８をかけて５回戦では優勝候補の愛工大名電と対戦した。

２－０と有利に試合をすすめていたが、５回表１アウトのところで雨で打ち切りに。

翌日再試合においても初回から緊迫、逆転・同点の繰り返し、そして３－３で迎えた９回表の土壇場で４－３と勝ち越し、勝利を確信するも、９回裏愛工大名電の連続スクイズで惜しくも勝利を逃し、ベスト８にはならなかった。

しかし強豪相手によく戦い、健闘を讃えたい。

＜星城中学校＞

◎第５回感謝祭（９月20日、21日）

教育目標である「感謝のできる実践力に富んだ逞しい人間の育成」の実践の場として第５回感謝祭を開催いたしました。

星城中学校創立５周年を機に、さらに新しい伝統を築き上げる記念の感謝祭として、テーマ「創造」のもと、日常活動の発表の場として生徒が一丸となって取組み、思い出に残る有意義な２日間を過ごすことができました。リーダー会を中心に、生徒一人一人が積極的に取組み、努力した成果が現れた感謝祭でした。

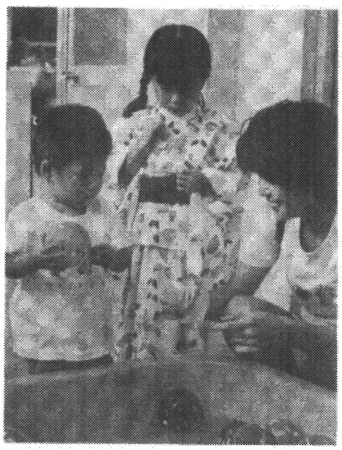
［主な内容］

１日目	リーダー会企画、内観体験発表、英語弁論大会、弁論大会
２日目	記念式典、記念講演会、合唱、器楽演奏会、クラス・展示発表

＜星の城幼稚園＞

◎『七夕会』

７月５日(土)自分達の作った笹飾りの下で、七夕会をしました。笹の飾りの短冊には、「お母さんの願いごと」「大きくなったらなりたいもの」などが書いてあります。また、「ちょうちん」「おばけ」「薬玉」「織り姫、彦星」「切り子」など一人一人が工夫した飾りがいっぱいつけてあります。笹は、高校の竹藪からとってきた、立派な笹です。七夕会では、先生たちの劇を見たり、七夕の話を聞いたりして、楽しい時を過ごしました。その後、母の会のお母さんたちにきり分けてもらった、西瓜を食べ、自分で飾った笹の枝をもらって帰りました。今年度は、未就園児のきらきら教室も同じ日に七夕会をしました。お母さんと一緒に西瓜を食べたり、お話を聞いたりして過ごしました。



◎『仰星合宿』

晴天の８月22日午後４時30分、リュックサックに荷物をいっぱい詰め込んで、年長組約80名の子供達が登園してきます。ちょっぴり不安な気持と大きな期待でいっぱいです。お母さんと「さようなら」をして、いよいよ合宿の始まりです。今年の夕食はバーベキューです。ピーマン、ソーセージ、トウモロコシ、ジャガ芋などを串に刺して焼きます。普段は嫌いで残す子の多いピーマンもしらずしらず、食べてしまいます。この後、高校のグランドでキャンプファイヤー、打ち上げ花火、肝試しなどなど、楽しい事をたくさん経験しました。一緒にお風呂に入るのも楽しみの一つです。興奮して眠れない子もいましたが、例年より泣く子が少なかったようです。どの子も一回り大きくなったようでした。

◎『夏祭り』

７月26日の予定が台風で、８月29日に延期になりました。残暑の厳しい日でしたが、日暮れと共に過ごしやすくなりました。ゆかた姿で、三三五五集まってきた子供達は、それぞれのお目当ての所に直行します。「子供カラオケ大会」にはたくさんのエントリーがあり、自慢の喉を聞かせてくれます。「迷路」では、“こんなの簡単！”と言いながら、何度も挑戦する子もいました。「ビンゴ大会」「ディズニー映画会」「おもちゃや」「くじびきや」「駄菓子屋」「食べ物屋」などなどお楽しみがいっぱいです。７時30分、いよいよ先生たちによる和太鼓の演奏です。自分のクラスの先生に声援を送りながらじっと聞き入る姿が印象的でした。ちなみにこの日の参加者は800名以上でした。

＜名英予備校＞

◎「夏期集中学習会」

前期終了後の7/22～26の５日間、集中学習会を実施。学習時間は9:00～19:30、各自が作成した学習予定に沿って「マラソン学習」に励んだ。自学自習のほかに、用意された各種テスト、センタートレーニングに取り組み、各教科の個別質問も活発に行われた。最終日は台風接近により、時間を繰り上げて散会したが、参加者は十分手応えを得たようであった。

◎「夏期講習会」

8/1～10、8/12～16、8/18～22の日程で実施。開講講座は30講座、ほかに英検対策講座、星城高校女子部実力養成講座を開講した。星城高校からも多くの生徒が参加し、講義終了後も自習室に陣取って学習に励み、盛況であった。（参加者数　309名）

◎「後期スタート」

9/8(月)から後期授業を開始。センター試験受験案内が届き、各大学の入学要項が具体的になるにつれ、受験勉強に拍車がかかってきた。テストや模試などで受験生は休む暇もないが、来春の合格を目指し職員も一丸となって頑張っている。

＜名英図書出版協会＞

◎『目標に向かって切磋琢磨』

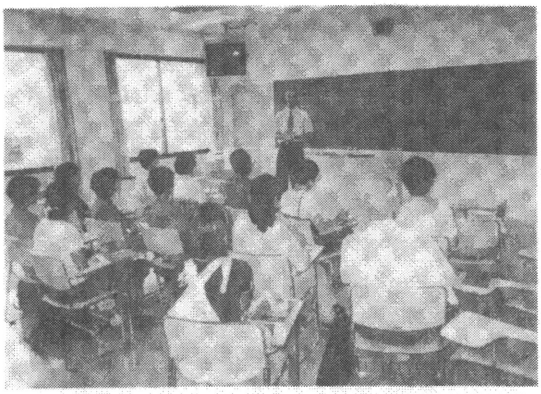
今年度から職員全員が日常の業務と並行して、それぞれの年度目標達成に向け、努力しています。その年度目標とは、職員のスキルが生かせるものであり、業務全体の効率化に直接または間接的に役立つもの や、教材売上増、経費節減に結びつくものなどです。主な目標は次の通りです。

・見本効率から販売代理店を分析
・マルチメディア教材の開発
・販売管理システムの合理化
・業務用データベースの構築
・中学校の地域別、教材別採択資料の作成／分析
・効率のよい在庫管理の検討
・コンピュータ業務のマニュアル作成

普段の業務の中ではあまり時間がとれませんので自宅に持ち帰って研究する職員もいるようですが、その努力の甲斐があって、７月末の中間発表では、職員全員が内容の濃い経過報告ができました。

時代の趨勢からか、目標の殆どに多かれ少なかれコンピュータ業務が関わっていますが、職員全員が自宅にコンピュータを持ち、個人差こそあれ、知識も伴っているために、時間が経過するにつれ、自然とその面でのレベルアップも図られています。

＝９年度オープンカレッジ開講＝



昨年に続き平成９年度もオープンカレッジを開講。本年度は、会場を短大のほか名古屋会場（予備校教室）でも開講。

開講回数も前期(4.19～7.12)・夏期(8.2～8.30)・後期(9.20～12.13)と開講時期を３回に分けて実施。

	「短大会場」	「名古屋会場」
＊前　期	９講座	６講座
＊夏　期	31講座	－
＊後　期	９講座	３講座

結果として、

＊前　期	13講座で参加人数約300名	
＊夏　期	31講座	〃　420名

と多数の受講者を迎えることができました。

いずれも、申込受付初日には、電話・ＦＡＸによる申込が殺到。特にパソコン、ワープロ、英会話関係には初日で定員オーバーする講座も発生。

夏期講座には、夏休みを利用の小・中学生等の受講者も多数参加。時代の要請かパソコンには特に申込が多く、急遽定員を増やして開講、大盛況でした。

夏期講座が終了した段階でアンケート調査を実施。

約80％の回収があり、年齢別では30代～40代で過半数、職業別では主婦が約40％で、女性が７割を占めています。全体の感想では受講料も安く、目的も仕事に生かしたい人、知識を増やしたい人が多く、大変為になったと好評。

後期講座についても受講者募集・開講中ですが、９月末時点では、12講座に300名の参加予定があり、キャンセル待ちも60名を数えるに至っています。本年度当初目標の受講者1,000名は達成できる見込みで、オープンカレッジは地域住民の理解も得られ、軌道に乗りつつあります。

○97年度後期公開講座（会場：名古屋明徳短期大学）

第３講　10月12日（日）14:00～15:30

『異文化間コミュニケーションから対人コミュニケーションまで』～理論と体験学習～

講師　前田　修江　　英語科講師

第４講　11月　1日（土）14:00～15:30

『南吉文学の成立と知多の自然』

講師　相地　　満　東海市立平洲小学校教諭

第５講　11月22日（土）14:00～15:30

『常滑焼と知多半島の風土』

講師　渡辺　敬一郎　　常滑焼作家

第６講　12月20日（土）14:00～15:30

『常滑窯を掘る～知多市西浦馬古窯群の調査から～』

講師　松原　隆治　　国際文化科助教授

◎『中教審答申にみる公立の中高一貫教育』

文部省が平成10年度予算の概算要求に盛り込んだ新規事業の一つに「中高一貫教育の推進にかかる実践研究事業」がある。事業内容は、47都道府県に研究を委託し、本年６月中教審第二次答申の中で提言された公立の中高一貫教育について、各県ごとにその設置形態、教育内容、入学選抜の方法等を研究・協議し、その結果を指定校方式による中高一貫教育実践協力校で実施するというものである。

この動きの中に公立の中高一貫教育の導入、推進にかける文部省の並々ならぬ意気込みを感じる。それは、高等学校教育の多様化、個性化を推進するために設置された総合学科への対応が各県まちまちで、必ずしも趣旨通りの展開になっていないことへの反省からか、あるいは審議の途中で全国の教育長の６割がその導入に対して慎重な姿勢を示したことへの危機感からか、とにかく素早い対応である。

答申で提案された公立の中高一貫教育のねらいを要約すると、「ゆとりのある学校生活の中で、それぞれの子供の個性や創造性を大いに伸ばし、義務教育段階での基礎基本をしっかり身につけさせ、年齢が進むにつれて多様化していく生徒の能力・適性・興味・関心・進路等に対応して、生徒の選択を重視した、できるだけ多様な教育を提供し、地域との連携を図りつつ社会体験や自然体験を中心に様々な体験学習を積極的に取り入れるような教育の創出」ということにある。

全体的に「ゆとり」を強調し、受験エリート校化したり受験準備に偏した教育を極力排除していこうとしている。そのために、地方公共団体が設置する学校にあっては学力試験は行わず、選抜が必要な場合でも抽選や面接、小学校からの推薦、調査書、実技検査などを組み合わせて入学者を定めることとされ受験競争の低年齢化を招くことのないようにという配慮を強調している。そのため一部に、答申全体は「個性尊重」「脱画一主義」が掲げられているが、中高一貫教育導入に向けての配慮事項を考えると「できる子」への対応については言及されておらず、結果として横並びの制度改革に終わることになりはしないかという声がある。

しかし、世の常として、進路選択や入試には「受け入れる側のエゴ」「送り込む側のエゴ」「保護者や本人のエゴ」「地域のエゴ」が複雑にからみあうことから、新しい制度が導入された時、検討段階の趣旨通りに運用されなかったり、機能しなかったりすることが多い。例えば、答申文の中で保護者に対して「中高一貫教育の導入の趣旨を理解し、大学受験に有利かどうかという観点だけで進学すべき学校を選択することのないよう求めたい。」と書かれているが、大学進学率が40パーセントを越している今日、保護者の多くが大学進学まで視野に入れて子供の進路を考えるのが当然であり、答申文の中のこの要請は空念仏に終わる可能性が強い。又、公立の中高一貫校を設置する地方公共団体も、入試無しで高校までという「ゆとり」以外に特色の出しにくい普通科よりは教育目標や教育内容に特色の出しやすい総合学科や、英語科、理数科、国際科等の専門学科を設置する可能性が強い。特に、専門学科については、保護者の意識と合わせ考えてみるとその設置校がその分野のエリート校になる可能性は否定できないのではないかと思う。

いずれにしても、今後の中等教育は構造的な生徒減以外に、完全学校週５日制へ向けての学習指導要領の大幅な改訂を中心に、県下でも六年制中等学校、単位制高校、総合学科設置校の配置など様々な動きが予測される。これまでも進められてきた教育内容や教育制度の多様化、弾力化が一段と進むことになる。又、公立への中高一貫教育の導入は、これまで進路指導に無関心であった小学校教員の意識変革を迫ると同時に、子供を持つ親の中高一貫教育への関心を高めることは確実であり、それらの動きに対しては的確に対応することが肝要なことである。「治に居て乱を忘れず」「安に居て危を忘れず」ということばがあるが、星城中学、星城高校に勢いがある今こそ様々な変革を視野に入れつつ中高一貫教育の更なる拡充に向けて、５年先、10年先の将来構想を描き、その実現のために学園が一丸となって取り組むべき時期を迎えている。

［研　　修］

◎「第７回 事務職員研修会」

今年で第７回目を数える『事務職員研修会』が８月26、27日の両日にわたり名英予備校講義室で行われた。今回は昨年までの内容を大きく転換し、男性職員（26日終日）と女性職員（27日午後）とを分離、また５年後、10年後の名古屋石田学園の将来を見据えて、40歳代までの若手職員のみを対象として行った。

26日（火）は朝９時より16名の男性職員が参加し１日目が始まった。石田理事長に開会の挨拶をいただいたあと、講師としてお願いした東海総合研究所の杉谷哲夫氏・松田照美氏により研修会がスタートした。午前中は全員が「職場組織と私たちの立場と役割」の講義を受けたあと、職場のコミュニケーションを考える「教育ゲーム」を４グループに分かれて行った。このゲームは１グループ４名が協力し合って、数々の図形の紙片を並べながら大きな四角形を完成させるものであり、普段のコミュニケーションの不十分さがゲームの結果に出るなど、日頃気づかない自分の欠点がゲームを通じて浮き彫りにされる一幕もあった。午後は一般職員と役職者で教室を分け、それぞれが自分の置かれた立場の中でどう行動すれば良いかを、事例研究などを通して学んだ。

長時間にわたった研修会であったが、参加者一同昨年までの内容を大きく変えた研修に大満足であったようだ。西川理事より閉会の挨拶をいただき１日目を終了した。

27日（水）は午後１時より女子職員12名が参加し、松田照美氏を講師としてスタートした。石田事務局長より開会挨拶をいただいたあと、各自が「職場のマナーチェック表」をもとに30項目にわたり自己点検・自己評価を行った。女子職員としての職場マナーの中で、自分はどの部分が弱いかをこのチェック表で明確にすることができ好評であった。後半は「顧客を意識した電話応対の実践」として、ビデオ撮影を交えたロールプレイングを行った。テレビ画面に写し出される自分の姿に照れながらも、先生からの鋭い指摘に真剣に耳を傾けていたのが印象的であった。翌日からの電話応対にこの研修の成果が出ることを期待したい。終了時間をオーバーするほどの内容で前日同様、全参加者が大満足であったようだ。

西川理事より挨拶をいただき２日間にわたる研修会を無事終了した。

過去６年間続いた研修会を反省し、形式だけの研修会に終わらせないために今年は大幅に変更して実施したがほぼ全員の参加者から「満足」という評価をいただいた。石田学園の将来を担うこの職員たちが、研修会で得たことを実践して行けば未来に明るいものがあると確信する。

◎「新入女子職員研修会」

平成９年度新入女子職員研修会が５月２日（金）法人本部において、５名参加のもと午後０時30分から５時まで行われた。

初めての試みで、内部講師として法人本部の事務局長・事務職員が各々担当分野について指導。

外部からは、東海銀行の女子行員を講師として招き「女子職員としての基礎知識」について研修。“職場のマナー・エチケット”から始まり、“ビジネス用語”“ビジネス電話の受け方”では練習問題を最初に行い、練習問題に沿って解説。他に応対の心構え、お茶のすすめ方等についても判りやすい説明があり大変好評。最後に理事長が「最近常識のない人が多い……、この研修を参考に更に自分を磨いて欲しい」と結ばれ、有意義な研修を終わった。

《学園表彰》

平成９年度の学園表彰者は、次のとおりである。

（敬称略）

勤続	30年	石田　正城	星城高等学校
	〃	中里　室喜	〃
	〃	林　　宏	〃
	20年	伊藤　正人	〃
	10年	喜多河四郎	〃
	〃	二階堂史紀	〃
	〃	赤星　明彦	〃
	〃	石川　暢夫	〃
	〃	竹内　　裕	〃
	〃	森　　正信	〃

《知事表彰》

平成９年度愛知県私立学校教員表彰受賞者として、星城高校から東武行・小林達両先生が10月22日、愛知県庁講堂で県知事より表彰されました。

編集後記

今年度は星城高校の創立35周年・星城中学の５周年にあたり、10月１日（水）石田記念館及び明徳館において合同創立記念行事が開催されました。

来年度は明徳短大の10周年も迎えます。

文部大臣の諮問機関である中央教育審議会も、公立の中高一貫教育を提言、導入の動きも出てきています。名古屋石田学園としても、これを機に星の城幼稚園も含めて、中学・高校・短大と一貫教育の拡充を更 に進める時期に来ていると思います。今まで以上に学園全教職員が一致協力していきましょう。